

産学官連携リスクマネジメントモデル事業 概要

I 新たなリスクの分析と把握

【現状】

- ・優先度の高いリスクとして把握していた「利益相反」及び「技術流出」については、平成29年度までにマネジメント方法をモデルとして構築したところである。
- ・他方、オープンイノベーションをはじめとした産学連携活動の本格化が求められている中、産学連携活動においては今までに想定していなかったリスクが生じたり、多様なリスクの中でも優先度に変化が生じることが予想される。そのような状況においては、産学連携活動を推進する上で、今まで以上に戦略的にリスクマネジメントを強化する必要がある。

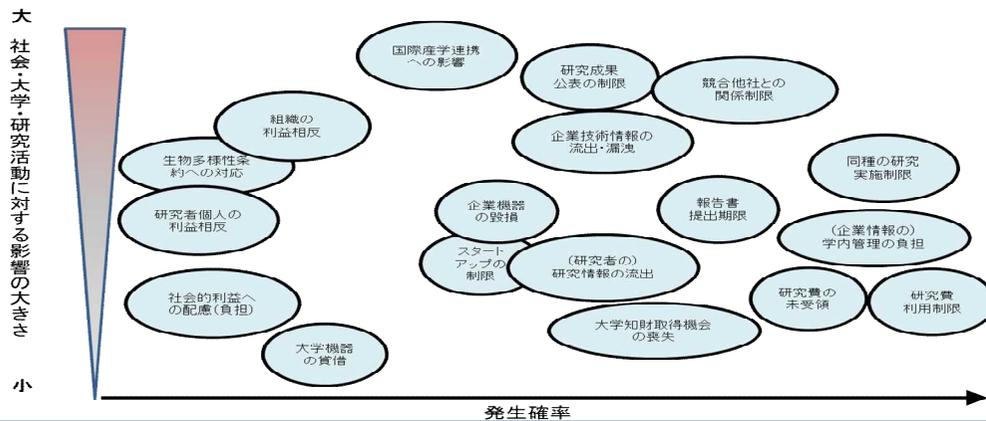
【課題】

- ・産学連携に係る優先的に対応すべきリスクを明確化するには、産学連携活動におけるリスクを俯瞰することが前提となるが、部局分散型の事務処理を行いがちな大学においては、現在充分にリスクを把握できておらず、また把握の方法も持ち合わせていないため、適切なマネジメントが行われているとは言いがたい。また、自大学で経験したリスクの把握に限定されるため、文科省が全国的な視点から調査・分析を行い大学現場への還元を図る必要がある。
- ・産学連携活動は、企業等の学外の多数当事者に影響を及ぼす作用があるため、信頼関係を確立しなければ、円滑なイノベーションの発展に支障をきたすおそれがある。このようにリスクの適切な管理・分析は、研究経営を最適化するための前提となるものであり、企業等との信頼関係の確立のために必要不可欠である。

【解決方法】

- ・リスク把握手段として民間企業で実施されているリスクマップを大学においても作成する。
- ・作成したリスクマップを基に、産学官連携活動における優先的に対応すべき新たなリスクを特定し、その上で分析し、大学本部主導による横断的なマネジメント体制の構築等を行う。

全学のリスクマップ(イメージ)



II リスク情報を的確に把握するための基盤づくり

【現状】

- ・リスクマネジメント管理部署以外の部署は、業務の遂行に必要な情報の中にリスクマネジメントに必要な情報があることについての認識が希薄であり、組織として全体的にリスクマネジメント情報を効果的に活かしてきていない。

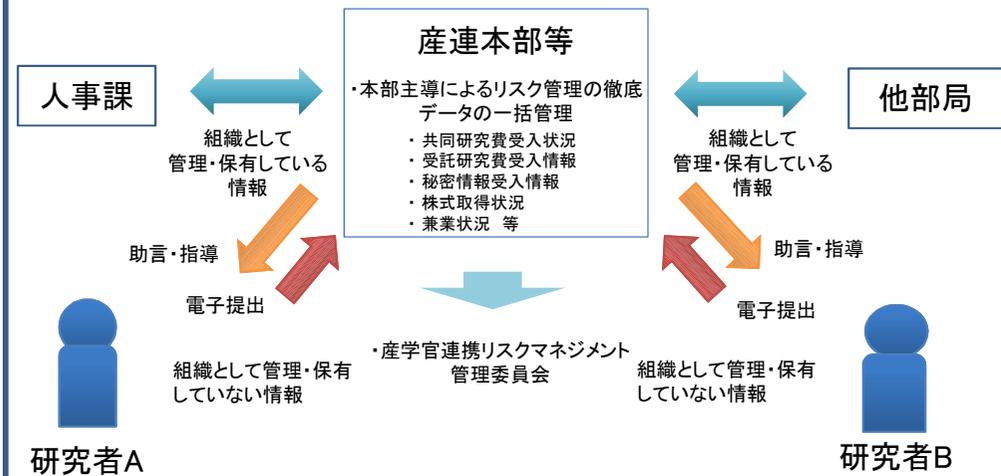
【課題】

- ・組織としての管理を徹底するために、組織として必要な情報を横断的に有効活用することで、実効的なマネジメントを実施することが必要となる。

【解決方法】

- ・リスクマネジメント管理部署以外の部署が管理・保有する情報のうち、リスクマネジメントに必要な情報を特定、集約し、さらに効率的な収集方法を検討し、本部主導による厳格な管理体制の構築等につなげ、リスクマネジメントの効果的なオペレーションに向けた基盤づくりを行う。

事務処理方法(イメージ)



III モデルの全国的な普及

- ・全国を4ブロックに分け、ブロックごとに研修等を開催し、全国的にモデルの普及・啓発を行う。
- ・具体的には、平成29年度に構築した「利益相反」及び「技術流出」への対策を中心に「新たなリスク」も含めて、事務処理モデルの紹介・解説等を行い、全国の大学に広くモデルを普及させ、関係する体制構築等について指導・助言を行う。